

豚コレラの予防について

県畜産課 藤原若彦

最近豚を飼う農家がふえ、特に共同経営による多頭飼育が盛んになるに連れて、伝染病の発生が多く、その中特に全国的に豚コレラの流行は著明で、農家は経済的に大きな被害をうけています。

豚コレラは今までは、春先から秋にかけて多発する傾向にありましたが、最近では1年中発生しており、今年に入ってから1月中に既に13県、1,673頭の発生があり、以後続発し、3月17日現在で2,302頭の発生を見ております。

その発生県は、隣の広島、兵庫、大阪を始め茨城、東京、神奈川、山梨、長野、静岡、愛知、三重、長崎、熊本と殆んど全国に汎く発生を見ております。

とくに本年の豚コレラの発生の傾向は、多頭数飼育のものに多発する様相を示しています。

このような発生の原因は、

- 1、仔豚生産地の清浄化が徹底していないこと。
- 2、仔豚の移動が頻繁となるにつれて感染の機会が多くなったこと。
- 3、共同経営等により新たに多頭数飼育を始めた経営者が、本病に対する警戒心がうすいため、予防について十分な手段を講じていないこと。
- 4、病豚の発生届が遅れたため、発生から防疫措置を講ずるまでに相当の日時を要したこと、等が多発の原因としてあげられています。

次に病原体と伝染の方法について述べますと、本病の病原体はヴィールスで経口的に感染します。このヴィールスは熱や薬品に対する抵抗力が強く、血液の中では15～25度Cの室温で2～3ヵ月病豚の肉を塩漬したり、冷凍しても6ヵ月から1年位は生きています。亦消毒薬のうち石炭酸は効果がありませんが、このヴィールスに1番よく効く3%クレゾール石鹼液、3%苛性ソーダ液でも1時間位は生きています。

この様に抵抗力の強いヴィールスは病豚の尿尿、眼やに、鼻汁等から排泄されます。尿では1ccの中に1,000～10,000頭に伝染させて死なせるほど大量のヴィールスが含まれています。この排泄されたヴ

ィールスは豚を扱う人の衣服、手、指、靴等に付いて運ばれ、又は病豚を扱った人の衣服等が健康な豚に触れて伝染して行きます。

豚コレラになった時の症状を簡単に申し上げますと、先ず食欲が無くなり、豚房の片隅にうずくまり、また敷藁の中へもぐってしまいます。体温はこの場合41～42度Cあります。また眼やにを出したり、便秘や嘔吐があり、遂には悪臭のある下痢をし、無理に歩かせると腰がふらふらしたりします。この場合多くのものは体の表面、殊に肢、腹、耳等が赤紫色になります。

本病の予防の方法として一般的に考えられますことは、

- 1、餌は必ず充分に煮て与えます。特に残飯を餌としている場合必要です。
- 2、豚舎に出入りする人を出来る限り制限し、隣近所や親しい家の豚が病気になった場合も豚舎に近づいたり、豚に触れない様にします。又豚の世話をする人は特定の人を決め、その人以外は豚に触れない様にします。豚舎の出入口には踏込板と云って3%のクレゾール石鹼液を入れた箱を置き、中にむしろ等を入れて、出入の際には必ずこの中に入って靴を消毒します。
- 3、仔豚を購入する場合、購入先や付近に病気の豚が居ない事を確かしてから購入し、購入した豚は隔離した豚舎に入れて3週間位観察し、異常のない事を確かしてから一般の飼育豚舎に入れる様にします。

今までに述べた3つの事柄は管理面からの予防原則ですが、これだけでは充分とはいえません。1番大切なことは予防注射を確実にこなうことで、豚コレラの予防注射の効力は非常に高く、90%以上の効果を揚げる事が出来ます。

この予防注射は家畜保健衛生所が中心になって全県どこでも春秋2回の定期注射を行ない、春は緑、秋は赤の耳標が着けられます。また哺乳中のため猶予された仔豚は、乳離れのときに随時注射が行なわれています。特にせり市場に出るものは必ず出場2

岡山畜産便り1962.05

週間前には予防注射をすることが必要です。

また、多頭数飼育経営の養豚場等から新しく導入された仔豚は、証明書や耳標等により、予防注射済であることが確認されても、隔離豚舎で3週間程度の観察期間をおく事は勿論ですが、導入後2ヵ月以内に出来るだけ早く補強注射を実施して下さい。

その他本病予防上注意することは、病豚の届出を早期にすることで、特に関係者の協力を願います。